



YOKOHAMA ASAHI ROTARY CLUB WEEKLY

「ロータリー：変化をもたらす」 Rotary: Making a Difference

2017-18年度 RI会長／イアン H.S.ライズリー RI.D2590ガバナー／湯川 孝則 横浜旭RC会長／滝澤 亮

国際ロータリー第2590地区

横浜旭ロータリークラブ

事務所 横浜市旭区二俣川1-37-3 NUTS1階/〒241-0821
TEL.045-465-6702/FAX.045-465-6712
http://yokohamaasahirc.cho88.com
Email:asahirc@titan.ocn.ne.jp

例会場 横浜市旭区二俣川1-45-30工藤ビル
(榎岡田屋3階会議室)

例会日 毎週水曜日/12時30分～1時30分



旭区民まつりにて熊本みかん販売



熊本自転車支援



ガールスカウトとクリーン作戦

2018年3月7日 第2327回例会 VOL. 49 No. 32

■司会 SAA 五十嵐 正

■開会点鐘 会長 滝澤 亮

■斉唱 君が代、奉仕の理想

■出席報告

会員数	31名	本日の出席数	28名
本日の出席率	96.55%	修正出席率	93.10%

■本日の欠席者

宋

■他クラブ出席者

関口 (横浜瀬谷 RC)、新川 (地区)

■ビジター

鶴岡 武様 (第5G ガバナー補佐、横浜緑 RC)

■ゲスト

坪井ひとし様 (難民を助ける会)

沈 佳穎様 (米山奨学生)

■恵送を受けた週報

横浜瀬谷 RC

■ひな祭祭祝

■3月誕生記念祝



田川 富男会員 3.30

市川 慎二会員 3.9

佐藤 利明会員 3.23

■会長報告

皆様、こんにちは。先日のIMの折にはご苦勞様でした。当日は懇親会まで残って、次年度増田ガバナー補佐と共に出席して参りました。又、私事ですが、4/7から1ヶ月ほど入院いたします。できるだけ皆様にご迷惑をおかけするのを最小にとどめたいと思います。

旭区の誕生50周年の委員会が開かれる案内状がとどいております。又、当クラブの50周年準備会も進めなければなりません。

■幹事報告

1) 例会臨時変更のお知らせ

○横浜瀬谷ロータリークラブ

日時 3月30日(金) 15時45分～17時

神奈川県警察本部通信司令課見学

○神奈川東ロータリークラブ



日時 3月30日(金)夜間例会

○横浜緑ロータリークラブ

日時 3月28日(水)移動例会 春の家族会

三崎港市場見学・まぐろ解体ショー他

2) 2018年2月台湾東部地震被災地支援の件
地区より要請の義援金の件ですが、2/26に
送金いたしました。ご報告致します。

■ガバナー補佐鶴岡様より御礼

本日は お世話になります。

今回は次期ガバナーになる増田嘉一郎様と打
ち合わせをかねてお伺いいたしました。宜し
くお願い申し上げます。

又、前後致しましたが、先日のIMにご参加
頂きまして有難うございました。

■笛田さんを偲ぶ会 兵藤 哲夫

日時 3月21日(水)祝日

一次会 い志井 午後6時～

二次会 グレース (二俣川銀座) 午後8時～
ゲスト 笛田さん長男、次女

*幹事 目黒さんへ 携帯 080-1090-9936

■国際奉仕委員会 青木 邦弘

○春・秋の遠足支援計画

参加者 外国人とその子ども約40人

講師とロータリアン約10人計50人

参加者の条件 日本語での感想文提出

・春の遠足はバスで富士山へ 予算12万円

・秋は未定 年間2回分の遠足補助として

お一人1,000円～2,000円のご寄付を!

■ニコニコBOX (会員敬称略)

滝澤 亮/①坪井様、本日の卓話よろしく
お願いいたします。②入院の日程が決まりま
した。4月は皆様にご迷惑をおかけします。

田川 富男/誕生日祝いをいただきまして有難
うございます。いつの間にか年金を受けられ
る歳になりました。

兵藤 哲夫/笛田さんを偲ぶ会を行いたい
と思います。ご都合つけてご出席下さい。3/21
(水)6時からい志井です!

佐藤 利明/①鶴岡ガバナー補佐、ご苦労様
です。②難民を助ける会の坪井均様、卓話よ
ろしく申し上げます。③誕生日祝いを頂きま
して、有難うございます。

関口 友宏/ベトナム・タイを旅行してきま
した。現地の気温は30数度、今日の横浜は9
度で戸惑います。

佐藤 真吾/①坪井様、お忙しい所、当クラ
ブにお越し下さり有り難うございます。卓話
よろしくお願い致します。②鶴岡ガバナー補
佐ようこそ。米山奨学生、沈さんようこそ。

倉本 宏昭/坪井様、ようこそ。お忙しい処、
今日は宜しく申し上げます。

内田 敏/坪井さん、本日の卓話よろしく
申し上げます。

青木 邦弘/春の火災予防週間です。昨日旭
消防署からメールが入りました。内容は、消
防団の夜警がうるさいとの苦情がありました
ので静かに回して下さいとのことでした。

増田嘉一郎/①鶴岡ガバナー補佐、ようこそ。
ご指導よろしく申し上げます。②坪井さん、
卓話楽しみです。

須藤 亘/本日の卓話、坪井様楽しみにし
ております。季節の変わり目です。寒暖差が
激しいので皆様どうぞご自愛下さい。

大川 伸一/坪井ひとし様、ようこそお出で
下さいました。本日の卓話をよろしくお願
いいたします。

吉原 則光/坪井ひとし様、ご多用のところ
卓話いただき有り難うございます。真冬のよ
うな寒さの中ですが、よろしく申し上げます。

市川 慎二/①鶴岡ガバナー補佐、本日はよ
ろしく申し上げます。②坪井様、卓話宜しく
申し上げます。③誕生日祝いを頂きまして、
有難うございます。

安藤 公一/①坪井さん、卓話宜しくおねが
いします。②鶴岡ガバナー補佐、ようこそい
らっしゃいました。③ピョンチャン五輪での
日本選手の健闘を祝して。

■卓話「支援の入口と出口」

坪井ひとし様



難民を助ける会の坪井です。難民を助ける
会は、海外で紛争にともなって難民となった
人々の支援や、地震・津波などの自然災害の
被災者を、都度海外に出かけて行って支援し
ています。また、東日本大震災など、国内の
災害の際にも支援活動を行います。

本日は、様々な支援がどのように始まって、
どのように終了するのか、「支援の入り口と出
口」について、難民を助ける会の活動をご紹
介しながら、お話したいと思います。

難民を助ける会は、1979年に尾崎罌堂、尾崎行雄ですね。政治家で生粋の平和主義者でした。その尾崎行雄の娘、相馬雪香が、67歳の時に、設立いたしました

当時、ベトナム、ラオス、カンボジアを襲ったインドシナ紛争で発生した沢山の難民が、陸路、危険な地雷原や国境をこえてタイやカンボジアに、あるいは小船に乗り、ボートピープルとして日本にまで流れ着いたときに、日本は国際社会から批判にさらされました。「カネ」は出すが「ヒト」は出さない日本、難民に冷たい日本、そうした批判です。相馬雪香が、こうした批判に対抗して、日本人が古来受け継いできた善意の伝統（と言うと何か難しいものに思えるかもしれませんが、ごく普通に私たちが口にする）、「困ったときはお互い様」の発想を、自分の身近な人だけではなくて、見ず知らずの難民の人々にも広げよう、伝えよう、としてできたのが難民を助ける会です。その後、難民を支援しようと出かけて行った現場で多くの障がい者に出会い、障がい者の支援を始めます。そして、その障がいの背景に平和になって難民が戻ってきた故郷に残されていた地雷や不発弾の問題があることに気づき、地雷・不発弾の対策に取り組むようになります。さらに、アフリカで、支援していた難民が故国に戻れるようになった際、私たちも日本に帰ろうかと考えたのですが、気がつくやうに、今までお世話になっていた国がHIV/エイズで大変なことになっていた。そこで感染症対策などの保健事業に取り組むようになりました。

こうしてお話すると、難民を助ける会は、何か特定の目的のみを求めて活動しているのではなく、活動する中で出会った様々な困難に対応して支援を実施してきたことがお分かりいただけると思います。NGOの中には、特定の目的、例えば人身売買の防止、といった一つの課題だけに取り組み、他のことはやらない、という団体もあります。でも、私たちは、少し大きく捉えて「すべての人が自らの意思に基づいて、人間としての尊厳を保ちながら生きていける世界」をめざして活動していくことにしています。そういうやりかたもあって良いと考えています。

1999年から2000年の話ですが、難民を助ける会は、コソボで、アルバニア人とセルビア人のための民族融和事業を行いました。難民を助ける会の職員と日本から派遣したイン

ターンが、人口の9割近くを占める多数派アルバニア人地区のみならず、少数派セルビア人の居住区においても活動し、両者の接点をつくる活動、あるいは少数者のセルビア人の移動の安全を確保するためのエスコート事業などを行いました。NATO軍の空爆終了直後で、行政は完全にストップしています。紛争の傷跡のみならず、こうした行政の活動の停止から、州都プリシュティナでは、町中のいたるところにごみがあふれていました。特に、両方の民族が混住するアパートの周りで、そのゴミの状況はひどく、(片方の民族のみが住んでいる地域はそれぞれの住民が自ら清掃活動をしたのです) 惨憺たる有様でした。

この惨状に着目した難民を助ける会の職員は、日本人が総出で、両方の民族に声をかけ、作業終了後には、おいしいお菓子や飲み物を出す、という宣伝して、大々的に清掃作業を行いました。最初はうさんくさそうに、遠巻きにしていたアパートの住民でしたが、最初はお菓子と、そして物珍しい外国人である日本人に釣られて、両方の民族の子どもたちが、そしてその母親たちが参加し、これに一人、またひとりと賛同者が増え、1日の終わりには、まったく接触のなかった二つの民族の住人が、コーラや菓子パン、チョコレートを食べながら、談笑する風景まで見られました。この方式は、現地で活動していた国連からも高く評価され、特に両方の民族が混住する地域で積極的に採用されました。

難民を助ける会は、この事業のほかに、コソボで地雷や不発弾の除去作業、そして、地雷の事故にあわないために、地雷回避教育も行いました。こうした誇れる実績とともに、他方で、コソボには苦い思い出もあります。危険な紛争直後の地域での活動には、安定した地域とは比べ物にならない資金が必要です。安全面を確保するための資金、定期連絡のための通信費、車両、平時の10倍以上する海外渡航保険などです。また、自分たちの体力以上の仕事を、現地のニーズを優先して開始し、活動を他の事業でも拡大していたため、東京本部の管理業務もうまく機能させることができませんでした。こうした限界と、おもに、資金の不足から、私たちは本来であれば5年10年と続けるべき「民族融和事業」をたった1年ほどで終了せねばならなくなってしまったのです。

こうした教訓を生かし、現在、難民を助け

る会では、事業を開始する際に、どのようにすれば安定的に支援を継続できるか、しっかり検討するようにしています。難民を助ける会は、毎年、複数の新しい緊急事業を立ち上げます。この1年間でいえば、7月に九州豪雨の被災者支援、その後、ミャンマーの避難民、ロヒンギヤの人々ですね、彼らがバングラデシュに逃れる事態となって現地で支援活動を始めました。その前の1年は、アフリカはウガンダに逃れた南スーダン難民の支援、熊本地震の被災者支援、岩手県で台風10号の被災者支援も行いました。

支援を始めかどうか考える際、私たちが検討するは、(1) 紛争や災害により、即座に適切な行動を取られなければ、人々の生存や福利が脅かされる状況かどうか、(2) 自国の力では、生存や福利の回復が極めて困難な状況かどうか、(3) 被災の規模が甚大かどうか(4) さらに、治安状況、アクセス、言語などの現地の状況(5) 自分たちの実施キャパシティ、例えば、既に難民を助ける会で別の国に緊急支援を実施している場合は、新たに派遣する人材がいるかどうか、とか、相手国のルールで現地のパートナーがいないと活動できない場合は、信頼できる現地団体があるかどうか、などです。そして、それらに加え、その活動を継続していけるかどうか、この点にも注目しながら、支援の開始を検討します。

一方、支援を終了する時は、どうなのでしょう。事業を上手に終了するのは、始める時より難しいです。最初にお話したコソボの例は、理想と現実のギャップに飲み込まれた例でした。事業を終了する際、私たちの活動は福祉活動なので、その成果が定着したり、安定していることが、一つの指標になります。

例えば、現在、ミャンマーで実施している障がい者の支援を例にとると、この活動は障がい者の職業訓練を実施して、一人ひとりが自立できることを目指しているのですが、裁縫や理容 = 散髪ですね、そしてコンピュータなどの技術を身につけて障がい者が収入を得られるようになる、という活動です。毎年、150人近い障がい者が巣だっています。始めて20年になります。20年前から継続しているのは縫製と理容で、コンピュータはまだ数年ですが…。このような事業は、本来国や地方の行政が背負っていくべきもので、その時がくれば、難民を助ける会は撤退して良い、と考えています。ただ、ミャンマーは経済的

に発展段階に入っていますが、障がい者支援は後回しになっていて、それは他の国々でも同じように後回しになっていることが多いのですが、難民を助ける会はなかなかこの活動を終了できそうにありません。

国内に目を移すと、難民を助ける会では、現在策定中の2018年度(4月～翌年3月までが会計年度)の事業計画に、熊本地震の被災者支援や、九州水害の支援を盛り込んでいます。予算も計上しています。ただ、規模は小さなものになっています。翌2019年度には、それらの活動は盛り込まれないでしょう。もう支援の必要がない、と考えているわけではありませんが、様々な機関からの支援が実施されていることやこれまでの復興状況を考えると、そして難民を助ける会の人員や資金などのリソースをどこに注ぎ込むのが重要か、という点を考慮すると、一定の判断が必要なタイミングが来ている、と考えているのです。

一方、東北の支援は今後も継続していくことを決めています。難民を助ける会は、宮城、岩手、福島、の東北3県で活動してきました。現地の状況は、みなさんも岩沼の様子からご存じのとおりです。インフラ面は整ってきたものの、人々の生活が以前のように整っているわけではありません。私たちは福島県でも活動してきましたが、福島県は放射線の問題もあり、より長い支援になると考えています。

東日本大震災には、普段は海外で活動している多くの(私たちと同業の)NGOが、支援を実施しました。NGOの中には、引き続き支援を実施している団体もありますし、やむを得ず5年の節目をメドに支援を終了した団体も多くあります。

私たちにとって、東日本大震災から7年目を迎える今、引き続き支援を実施できることは、誇りでもあります。コソボでの経験のおかげ、と言えるかもしれません。ただ、決めただけからといって、そのことと容易に継続できるかどうか、ということは別です。支援を継続するための資金も確保しなければなりません。そして、なにより時間の経過にともない必要な支援は変化してくるので、常に何が求められているのか、現場を見ながら進んでいくことが必要です。そのような点をしっかり見つけて、今後も活動を進めていきたいと考えています。以上

■次週の卓話 3/28(水) 倉本 宏昭会員
週報担当 本山 雄三